国語科

公開授業①　-Challenge to Creative Lessons-　CCL

他者の言葉とのかかわり合いをとおして，言葉の世界をひらく国語科の授業づくり

第１学年　渕　山　真　悟

● 目指す子ども像（言葉の世界をひらく子ども）

・自ら課題意識をもって学び続ける
・他者の言葉を的確に理解し深く受け止める
・進んで適切に表現する

● 言葉の世界をひらく国語の授業

子どもたちは，さまざまな他者の言葉とのかかわり合いをとおして，自分の言葉を見つめ直し，新たな言葉を獲得していく。また学習の深まりを確かめたり，他者と共に学習することのよさを実感したりする。

そしてこの過程を繰り返し積み重ねていくことによって，語彙を増やし表現力を豊かにすると共に，新たな認識を広げ，言葉の世界をひらくことができると考える。

「他者」とは
・目に見える形で存在する他者
　教師　他の学習者　　など
・目に見えない存在としての他者
　テキストの筆者や作者
　過去の自分　　など

● 単元　ばめんをそうぞうしよう（「ろくべえ　まってろよ」灰谷健次郎）

一年生において，文学的文章を読む最後の学習です。これまでの学習を生かしたり，自分の考えを持って仲間と考えを交流したりすることで，言葉の世界をひらく基盤をつくっていきます。

設定する他者の言葉

① テキストとしての他者の言葉

〇これまで１年生で学習してきた教材を，本教材を読む際に活用する。

・「はじめは『や！』」は物語，「いきもののあし」は説明文。では「ろくべえまってろよ」はどちらだろう？

・「おおきなかぶ」の登場人物は～だった。「ろくべえまってろよ」では，だれが登場人物なのだろう？

② 他の学習者としての他者の言葉

〇友だちの考えが，自分の考えと同じか違うかを考え，本文の読み取りに活用する。

・最後にロープをひっぱったとき，私は一気に素早くひっぱったと思っていたけれど，ゆっくり丁寧にひっぱったと言っている人もいる。どちらが正しいのだろう。

他者の言葉を授業の中で，意図的に設定することで，子どもたちに学習の深まりや他者と共に学習するよさを感じさせていきたい。

１年生でもできること・１年生だからできること

学力形成を目指すことで，子どもたちに国語を学ぶ有用感をもたせる

漢字

子どもの負担に配慮しつつも該当学年以降の指導をしている。

・第１学年の 80 字に加え，連絡帳や算数の学習でよく使う漢字を指導する。

・毎日 10 問の漢字テストを行い（出来たら２回）答え合わせは，子どもたちにさせる。

日記

つながりのある文章を書く力を伸ばすために，また漢字や促音，かぎ（「」）などを文章の中で使うことができるようにするために，家庭学習の課題として毎日日記に取り組ませる。

・毎日取り組ませるために，ノートとプリントを併用して行う。日記に対するコメントは，ノートのみに書く。

・子どもの負担軽減のために，最低限書くべき文字数を設定する。

・子どもたちの漢字への興味を喚起するために，日記で使用した漢字を数えさせる。

・取り組みへの飽きを防ぐために，数種類のプリントを用意し段階を作る。

暗唱

知ることの喜びを感じさせるために，有名な言葉や詩に出会わせる。繰り返し学習することの大切さを学ばせるために，暗唱を目的として何度も読ませる。

＜これまでに取り扱った題材＞

・和風月名　　・いろは歌　　・俳句（松尾芭蕉・小林一茶）

・十二支　　・詩（金子みすゞ・谷川俊太郎など）

参考文献：

徹底反復音読プリント一小学校全学年（教育技術 Mook 陰山メソッド）陰山英男

声に出して読みたい日本語　草思社出版　齋藤孝　など

読み聞かせ

読書の楽しさを感じてもらうために，「おれたちともだち」シリーズや昔話の読み聞かせを，帰りの会で行っている。

本を読むことが好きな子どもは 92%いる。「読み聞かせと，自分で本を読むのでは，どちらが好きですか。」という問いに，97%の子どもが，自分で読む方が好きだと答えている。５月に調査した際は，読み聞かせが好きな子どもの方が多かった。徐々に自分で本を選らんで読むことの楽しさを感じてくれているのだと思う。この現状を受け，現在，新たな取り組みを考えている。